

Title	第349回京都外科集談会
Author(s)	
Citation	日本外科宝函 (1958), 27(6): 1581-1582
Issue Date	1958-11-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/206698
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

第349回京都外科集談会

昭和33年9月27日

(1) 左腋窩部に発生せるノイリノームの1例 整形 山室 隆夫

症例 29才 男子

3年前より左肘関節の尺骨側に軽度の放散痛あり、徐々に程度が強くなり、入院時には腋窩部を圧迫すると耐え難い放散痛を来す様になった。左上肢全体の筋萎縮、肩及び肘関節運動の軽度の障害あり、手部では左尺骨神経不全麻痺の症状がつあがた、触診にては腫瘍を発見出来なかつた。手術により左腋窩部に尺骨神経幹より発生したと思われる鵝卵大、弾性軟の腫瘍を発見。腫瘍は腋窩動静脈、正中神経、橈骨神経等を強く圧迫しており、尺骨神経は腫瘍発生部にて全く萎縮性であつた。腫瘍剔除と同時に尺骨神経縫合をなした。術後50日にて尺骨神経麻痺以外の殆んど障害は消失した。腫瘍は組織学的に定型的なノイリノームであつた。

(2) 1側性交叉性腎変位を伴える移動性盲腸の1例

公立關ヶ原病院 長谷川豊男、佐々木数能
森節子、金森正子、○岡田芳彦

20才男、2年前より右側腹部に鈍痛を来し、半年前より同部に大人手拳大の腫瘤を触知し、最近腹痛が度々起り且強くなつた。該腫瘤は右遊走腎であると思われたが、逆行性ピエログラフィーにより左腎が右側へ変位しているものである事が分つた。腎機能は両側共正常である。経肛門腸造影により、盲腸は移動性大であるが他の結腸走行は正常であつた。開腹術により右腎の位置、大きさは正常で、変位せる左腎との融合は認めず即ち、非融合型の一側性交叉性腎変位である事を確め得た。変位腎の摘出は行わず、盲腸固定術を施したのみで上記腹痛は消失した。疼痛は変位腎によるものではなく、移動性盲腸によるものと考え。尚本例の如き非融合型交叉性腎変位は極めて稀な先天性畸形である。

(3) 唾液腺混合腫瘍の3例

外科2 恒川 謙吾

1) 44才男子の耳下腺。45才女子の顎下腺。49才男子の口蓋腺の夫々に発生した良性混合腫瘍の3例を経験したので其の臨床及び組織学的所見を報告した。

2) 発生場所に相当して耳下部、顎下部、口腔内に夫々6年から10年に亘つて存在し、徐々に増大して来た無痛性腫瘍を主徴候とした。

3) 病理組織学的に検索した結果、何れも良性唾液腺混合腫瘍であつて、第1例は上皮腫部を主とするもの、第2例は上皮腫部、粘液腫部及び類軟骨部を含むもの、第3例は粘液腫部を主とするものであつた。

(4) マラリヤ様発熱を来した胃結核について 日立安来病院 ○小崎信志、木村 一雄

胃結核には開放性肺結核に合併して、管内感染の結果、幽門狭窄の臨床像を呈して来るものが多いが、我々は管外性に上胃淋巴腺結核から胃に及び、遂に胃壁に瘻孔を形成したと思われる胃結核の一例を報告した。

本症例は次の如き特異性を有していた。

①約2ヵ月間にわたりマラリヤ様発熱を繰返した。

②筋性防禦が左直腹筋にのみ強く現れ、恰も筋炎を疑わしめるが如き所見を呈した。

③胃X線透視上、胃潰瘍の場合同様の「ニツシェ」を証明した。

④胃小湾中央部に結核性瘻孔を生じ、腹腔と胃内容が交通し、胃内容が外にもれて混合感染を来し高熱を発したと考える。

(5) 胃ポリープの2例

大羽病院 ○辻 秀哉、毛受 武重
西川 正一、前田 敏郎

貧血を伴つた胃ポリープ2例を報告した。1例は術前X線所見上スダレ様陰影を呈した軟性乳頭腫であり、上皮細胞に前癌性変化を伴つていた。他例は胃潰瘍の大出血のために胃切除術を行つた例で偶然発見されたものであり、腺腫様ポリープであつた。

(6) 胃細網肉腫の1例

外科2 ○中村正則、武田淳、野々山明

上腹部鈍痛を主訴として入院した56才の女で胃癌の診断の下に胃切除を行つたところ、組織学的検索によつて胃に原発した細網肉腫であることが判明した1症例を報告した。本邦では胃細網肉腫は本例を含めて24例が報告されて居る。

(7) 重複癌の3例について

外科 I ○加藤 忠雄, 倉橋 道男

我々は最近3例の重複癌及びその疑われる症例を経験した。即ち第一例では中部食道及び胃体部の腫瘍で、食道腫瘍は扁平上皮癌、胃体部腫瘍は剔出してないため組織像不明、第二例では噴門部及胃体部の腫瘍で、噴門部腫瘍は腺癌と単純癌、胃体部の腫瘍は単純癌で一部腺癌が含まれていた。第三例は中部食道及胃洞部の腫瘍で食道腫瘍は扁平上皮癌、胃洞部腫瘍は単純癌であつた。重複癌に対する Billroth の定義によれば、第三例を重複癌とするに異論はないと思ひ、これ等3例の症例を報告すると共に若干の文献的考察を加えた。

(8) 胃潰瘍、胃癌患者に於ける血清コバルト、カドミウム反応の臨床的意義について

大和高田市民病院 松本 彦晴, 猪木 弘三
中江登志雄

血清コバルト、カドミウム反応は主として肝硬変の診断及び予後の判定に對して有力な指針を与えるものとして、臨床的に利用されて居るが、我々は最近2年間本院にて外科手術を行つた胃潰瘍、胃癌患者129名について両検査を施行し、若干の知見を得たので茲に報告し、此の方面に於ける両反応の診断的意義について考察を加えた。

(9) 約19年間腹腔内にあつて、ミイラ変性した胎児を有した腹膜妊娠の1例

大和高田市民病院 外科 杉本 雄三,
○玉木 泰嗣

左輸尿管結石を疑い手術を行つた処、約19年間腹腔内にあつてミイラ化した約4ヵ月に相当する胎児であつた腹膜妊娠の1例を経験したので報告する。

症例、44才女子、約19年前妊娠6ヵ月時、突然激しい下腹部痛、性器出血を來たし、失神転倒、約1ヵ月自宅にて療養に努めたが、性器出血が持続するので、某病院に入院、約50日目退院したが、その際腹部膨満は消失していた。然しその後も左下肢の突つばる様な感じ、左腰痛を來し、更に尿意頻数、排尿痛をも來す様になつた。2年後正常妊娠で一子を産んだが最近上記苦痛が増し来院。左輸尿管結石を疑い手術を行なつた処、腹腔内より約4ヵ月に相当するミイラ化した胎児を得た。胎児はその頭部を大網膜で包裹され、子

宮底部左側にて腹膜に癒着していた。子宮及び附屬器に異常は認めなかつたが、原発性腹膜妊娠か、続発性腹膜妊娠か不明である。

(10) 胆嚢胸腹壁瘻の1例

松阪市民病院 外科 吉武泰男, ○内山輝美
吉見博夫

症例、72才、男、元農業に従事す。

約2年前より右季肋部に瀰漫性鶏卵大の膨隆部出現し、種々治療を受けるも治癒せず、昭和33年1月初旬本院外科外来に於て、切開其の他治療を加えるも瘻孔閉鎖せず更に諸種検査を行つたが、確實な診断を下し得ず、3月初旬瘻切開術を施行せるところ胆石による胆嚢胸腹壁瘻であることが判明、胆石除去、ゴムドレイン設立により術後21日目胆汁流出停止、60日後経快退院した。術前確實な診断を下し得なかつた理由として、1)瘻孔よりの膿が胸腺結核の夫れに似て胆汁を思わせるには、およそ縁遠いものであつた事、2)瘻道が肋骨のためか曲折し細小であつたので、Sondierung造影剤注入其の他による診断が困難であつた事等があげられる。本症例に関する文献は探し求め得た範囲内では、本邦で大正14年來数例に止まり比較的稀な存在であると思われたので以上に文献的考察を若干加えて報告した。

(11) 乳児特発性総輸胆管拡張症の1例

外科 I 中原 弘, ○小野 博通

本症は十代の女子に好発するものとされ、本邦に於ける最年少の報告例は生後52日目である。我々は生後35日目の男児に發生した本症を生後52日目に総輸胆管十二指腸吻合術により治癒せしめたので報告した。

尚拡張せる輸胆管の内容は約400ccで腫瘤は略骨盤腔に達し、乳児の体格に比し非常に巨大であつた。

(12) 特異な経過をとれる小脳橋角囊腫性蜘蛛網膜炎の1例

外科 I 福田 治彦

症例51才男子右側難聴、顔面右半側の知覚異常、歩行障害、視力障害、頭痛を主訴とし、約2年前より慢性に経過した小脳橋角蜘蛛網膜炎が、比較的短期間に囊腫を形成し、脳圧亢進症状と共に、Winkelsyndromを來たし、術前小脳橋角腫瘍を疑わしめた。後頭下開頭により、橋角部に囊腫性蜘蛛網膜炎の存在を確認し、囊腫内容排除術を施行し、症状は速かに好転した。